
この広い世界の片隅で

葵 舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この広い世界の片隅で

【Nコード】

N3219H

【作者名】

葵 舞

【あらすじ】

ネセルは魔王討伐軍の末端兵士として魔王軍と戦い続ける日々を送っていた。ところがある日突然森の中で女と出会ったことをきっかけに、ネセルの運命は少しずつ変わっていく。

1. 戦場での団欒（前書き）

半分寝ながら書いたので意味不明な言葉や文法、誤字脱字があるやもしれませんのでもし見つけられたなら報告していただくとうれしいです。

1. 戦場での団欒

戦争は長引いた。

互いの戦力が拮抗していたのだ。

両陣営は互いの戦力を出しつくしていた。

今や、戦争は膠着状態に陥っていた。

ネセルは夕飯の配給の列に並んでいた。

ネセルのいる場所は、戦線の中でも特に激しいトロム地方の北方だった。

ここからしばらく北へと進めば、そこはもう、魔王の領土である。そんな場所でネセルは何をしているかというところ、まあ当然だが魔王討伐軍の末端の兵士をやっているのだ。

手っ取り早く金が入ると聞いて連れて来られた先がここだ。気づいた時にはすでに遅くて、「詐欺だ!」と騒いだらその場に

居た筋骨隆々でたくましく厳ついオッサンにぶん殴られた。

理不尽この上ない。

まあ元々そこそこに剣の腕に自信があるから大丈夫だろ、と何が大丈夫なのか自分自身よくわからないままに根拠のない楽観的な見方をしたが最後。

：結果は地獄だった。

ネセルの考えは溶けて液状になったアイスの如く甘かったのだ。

例えが回りくどい？

気にしないでほしい。

むしろそつとしておいてほしい。

最初の魔王軍との戦闘で兵士の半分が死んだ。

幸いネセルは大した怪我もなかったのだが、ネセルの周りは違った。

死体がごろごろと転がり、痛みに声を上げる怪我人がそこら中にいたのだ。

この時ネセルは初めて人の命の軽さを知った。

配給が終わり、兵士たちは賑やかに夕飯を食べ始めた。

その中にネセルも加わり、そこら中に兵士たちの楽しそうな騒ぎ声が響き渡った。

戦闘を繰り返す度に兵士の人数は減っていった。

ネセルはそのことに少しずつ慣れ始めていた。

戦場とはそんなものだということを理解したのだ。

納得はできなかったが…。

頭で理解できても心が受け入れられないことはあるのだ。

だが、慣れなくてはいけなかった。

そうじゃないと、自分が死ぬ。

それは嫌だ。

だからネセルは自分をこの状況に慣らすのだ。

「おいっネセル！ 暇つぶしに賭け試合でもやらないか？」

仲間の兵士が声をかけてきた。

賭け試合。

それも兵士たちがこの戦場で生きる活力を得るためのものだった。

何かに熱中できればそれでいいのだ。

それで死の恐怖をほんの少しの間でも忘れることができるのなら。

「ああ、わかった。今行く」

当然断る理由もないので、参加の意向を示しネセルは賭け試合の場所へと向かった。

1. 戦場での団欒（後書き）

今回こそ続けられるように頑張ります。
更新は遅いですが宜しくお願いします。

2. 【賭け試合】 前座

試合の相手は槍の扱いでは討伐軍の五指に入ると言われているヘーゼだった。

本来ならどこかの部隊長になっているはずなのだが、自ら希望してこの部隊にいる変わり者。

ついてない、とネセルは思った。

こんな大物が相手なら勝つことは無理に等しい。
勿論そう簡単にやられるわけにはいかない。

ネセルの得物は日二本の細くて軽い剣。

相手に近づいて、スピードを活かして死角から攻撃するのが得意だ。

一方、ヘーゼは槍であるために、ある程度の間合いを取らなくてはいけない。

つまり、ヘーゼの懐に入ればネセルの勝ちなのだ。

といっても、そう簡単にいくような相手ならどれほど嬉しいことか…。

「おいっネセル」

そんなことを考えていると、急にヘーゼがネセルに話しかけてきた。

「どうかしましたか？」

同じ身分とはいえヘーゼは名が知れている兵士なので、ネセルは敬語で答えた。

「おいおい、敬語は止めようぜ。俺たちは『名付き』同士だろ？」

『名付き』とは二つ名を持つ兵士のことである。

例えばヘーゼの二つ名は『神速』だ。

『名付き』は数えるほどしかなく、それ故に周りの兵士から一目置かれる存在なのだ。

唯一、ネセルを除けば…。

「大体、俺の二つ名はどちらかというと不名誉というか…」

「細かいこと言うなって。それに俺はお前のことを一目置いているんだぜ？」

それはまた期待しすぎもいいところだ、とネセルは内心苦笑した。

「…あのー、もうそろそろ試合を始めてもいいですか？」

近くにいた審判役らしき兵士が遠慮がちにそう言った。

「おっと！ すっかり忘れちゃってた」

ガッハッハと豪快に笑いながら訓練用の木製の槍を手に取り一定の間合いを取るヘーゼ。

それを見てネセルは何だかとても疲れが出てきてしまい、大きく溜息をついた。

「えーそれでは『悪運』ネセルと『神速』ヘーゼの試合を始めます。
……ヨーイ、ドンッ！」

何とも締まりのない微妙な掛け声とともに試合は始まった。
っーかそれ運動会で使うやつだろーが。

2. **【賭け試合】 前座（後書き）**

朝起きて雨だったらとても嫌な気分になりますよね。

3. **【賭け試合】** **【神速】** VS **【悪運】** **(前書き)**

遅くなつてすみません…。

3. 【賭け試合】 【神速】 VS 【悪運】

二人の間の距離は約5m。

ジリジリと互いを目線で牽制し合う。

先手を取りたいが、カウンターが来る可能性がある。

いや、ほぼ確実に来るだろう。

ならばこちらがカウンターを狙う…いや、【神速】相手にそれは不可能に等しい。

必死に考えるネセルに対し、ヘーゼは笑顔で怒鳴った。

「固まってんじゃねえよっ！」

咄嗟にネセルは右に飛び跳ねて転がった。

次の瞬間、轟——という音とともにネセルがさっきまでいた場所の周りの大気が震えた。

速い。

速すぎる。

アイツ、この一瞬で「突いて戻す」を三度やりやがった…。

勿論ネセルの動体視力では先ほどの動きが見えたわけではない。

ネセルはただ、槍が自分の側を通る音を聞いたただけだ。

「おう！ 今のを避けたか。やっぱお前、悪運強いわ」

ネセルの二つ名【悪運】は彼のこの悪運の強さに由来している。

例えば、ネセルがこの軍に来たその日に魔王軍が襲ってきた。

完全な奇襲という形でこの軍は大きな被害を受けた。

周り中怪我人や死体だらけの中、ただ一人ネセルだけは無事だったのだ。

他にも賭け試合で配給を賭けて負けた時、配給で出たものが腐っていたらしく集団で食中毒を起こして一人だけ助かったり、と例を挙げればきりが無い。

そんなことが起きているうちにいつの間にかそう呼ばれるようになったのだ。

「ほらほら、次いくぜ？」

再びヘーゼが槍を放った。

「――んにゃろっ！」

ネセルはそれを勘を頼りに必死でかわした。

そして次の攻撃がこないうちにさらに距離をとる。

無理ムリ！ アレは卑怯だって！ 勝てるわけないじゃないデスカ！？ と心中で半泣きになるネセル。

そんな彼を見た野次馬が罵声を上げる。

「オイ腰抜け！ 俺はテメーに二日分のメシ賭けてんだよ！ 尻尾巻いて震えてんじゃねーぞ！」

「さっさと闘えクソヤロー」

次第に野次が大きくなっていった。

そんな状況の中、ネセルは……ついにキレた。

「ウッセーよ！ 試合に出る度胸もねーくせにギャーギャー喚くんじゃねーよこの蛆虫どもがっ」

叫び、血走った目でヘーゼを見る。

イっちゃってるネセルの顔を見て流石のヘーゼも若干引きつった笑みを浮かべた。

「オイオイ：目がイっちゃってんじゃねーか」

「アイツら後で絶対殺ス殺ス殺ス」

「ちよっ怖えって！？」

会話もおぼろにネセルは突然ヘーゼに向かって突進してきた。

それを見てヘーゼは焦った表情をしながらも、冷静にタイミングを狙い槍を突き出した。

ヘーゼの槍はその速度のため、右にも左にも避ける時間を与えない。

だからこそ、その槍はネセルに当たるはずだった……。

「――なっ！？」

ネセルに槍が当たる寸前、ネセルの姿が――消えた。

いや、実際は消えたのではなく、

「もらったあアッ！」

下から響くネセルの声。

そう、ネセルは地面に滑り込むことでヘーゼの槍を避けたのだ。右に避けるにも左に避けるにも、必ずそこには運動のベクトルを大きく変えるために一瞬の停滞時間が生まれてしまう。

しかし滑り込むとなるとそれはほぼなくなってしまうのだ。

更に言うとう槍を下に向けて放つことは、他の場所に比べて神経を使う。

槍の先端が地面に当たらないように力を調整しなければいけないからだ。

それはつまり、思い切り槍を放つことができないということ。

ヘーゼが槍を引き戻し再び狙いをつけた時、ネセルはすでに体勢を戻してヘーゼの目の前に迫っていた。

（勝てる！！）

ネセルの剣がヘーゼに届いて

（勝てるっ！！）

ヘーゼの姿がぶれて

（勝…て…）

ネセルの意識はそこで途切れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3219h/>

この広い世界の片隅で

2010年10月11日01時14分発行